

国際シンポジウム「大野一雄・舞踏と生命」開催について

岡 本 章

大野一雄氏は、戦前から現代舞踊に携わり、一九五〇年代末から土方巽氏とともに舞踏を創始した。この日本発の画期的な現代舞踊は、現在、BUTOHとして海外でも広く認知され、様々な芸術領域に深い影響を与えている。その中心人物である大野氏の舞踏は、多様な言語、文化を超え、人々を感動の渦に巻き込む、他に類例のない優れた身体表象の達成といえる。また二〇〇二年には、イタリアのポローニャ大学で大野一雄アーカイブが開設され、海外での舞踏研究も盛んになってきている。

二〇〇七年十一月十七、十八日の両日、本研究所と文学部芸術学科が主催し、国際シンポジウム「大野一雄・舞踏と生命」が行われた。今回のシンポジウムは、大野氏の舞踏世界の全容を解明するため、国内外の多様な芸術、文化ジャンルの研究者、実践家が参加し、活発な発表、討議が重ねられた。またそれと

ともに、本学では一九九六年に大野氏を招きチャペルで講演会を開催しているが、今回は同時に大野一雄舞踏研究所の協力により関連企画として、大野氏の活動の足跡を振り返る「大野一雄展・舞踏と生命101」も行った。この文の筆者岡本は、企画者としてシンポジウムに関わったが、以下その概要を簡潔に記しておきたい。

今回の国際シンポジウムの意義、目的として次の五の課題が挙げられる。まず第一に大野一雄氏の前人未到の舞踏の営みの全容とその身体の深奥の構造の解明。老若男女、文化や国籍も超えて、魂が根底から揺さぶられるような大野氏の舞踏世界の特質を、日本のダンス史の流れや個別の作品研究の鋭い分析を通して捉え返してみること。そして舞踏を支えるとともに根源的な時間性を招来し、刻々自在に変身を遂げるその身体の深奥

の仕組み、構造の解明も重要な課題として浮上してくる。第二として、舞踏の形成過程と BUTOH の欧米への浸透に見る国際的な東西の文化交流のあり方。大野氏は戦前からドイツ表現主義舞踊を学んできた石井漢、江口隆哉、宮操子の各氏に師事しモダンダンスの修行をするが、戦後、土方巽氏とともに欧米のモダンダンスとも、また日本の伝統的な舞踊とも異なった独自の現代舞踊である舞踏を創始する。そして八〇年代になって大野氏や山海塾などの舞踏が世界に進出し、フランスのヌーベルダンスをはじめ多様な舞踊、芸術に影響を与え、日本発の外來語として BUTOH が定着していく。これは国際的な東西の文化交流の本来的なあり方を探っていく上で、一つの重要なモデル・ケースになるはずだ。続いて第三に大野一雄氏と「古い芸」の系譜の課題。一九〇六年生れの大野氏は、七十一歳で初演した代表作『ラ・アルヘンチーナ頌』により高い評価を得、世界的に広く知られることになるが、その後も九十歳代に至るまで毎回斬新な試みを行い、豊かで瑞々しい舞台を創出してきた。これは現代における古いと芸術の問題を考察する上で特筆すべき営み、事例であり、また同時に能や歌舞伎などの日本の伝統演劇の「古い芸」の系譜とそれはどのように関係しているのか。第四として、大野氏の舞踏世界と他の様々な芸術諸ジャンルとの影響関係が挙げられる。大野氏は文学、美術、音楽、映像など多様な芸術、表現行為との交流から貪欲に吸収し、その独自の舞踏世界を形成してきたが、他の芸術諸ジャンルに

も多大な影響を与えてきた。この両者の相互交流の中から大野氏の舞踏創造の秘密が明らかになるとともに、現代芸術の根底に横たわる共通の課題も浮き彫りになってくるはずだ。そして最後に大野氏の究極の身体表象と言語、文化、宗教などとの関係性。大野氏の舞踏世界は、狭く舞踊芸術だけに限定されるものではなく、言語、文化、宗教などわれわれ人間存在の根底の営みと密接に関係し、その深部の構造を照らし返してくれる射程を持つもので、そこから例えば根源的な生命の場の働きといった大きな課題も浮かび上ってくる。

ここで両日のシンポジウムの進行と発表内容について手短かに記しておきたい。十七日は、岡本章の基調講演「大野一雄の舞踏世界——シンポジウム開催の意義」から始まり、そこでシンポジウムの意図、課題が提示され、また大野一雄氏の舞踏世界の特質を具体的な作品『ラ・アルヘンチーナ頌』、現代能『無』、『花』を取り上げながら、身体の深奥の構造に一つの的を絞り解明した。続いて舞踊評論家の國吉和子氏によって、「舞踏登場前夜——戦後日本のモダンダンスと大野一雄」の発表があり、大野氏が舞踊家として活動を始めた一九三〇年代から一九七七年の『ラ・アルヘンチーナ頌』を初演するまでを三期に分け、資料を駆使し、日本の近代舞踊史の変遷の中で、大野氏の舞踏の営みを丁寧に通り位置づけた。そして美学・ダンス批評の木村覚氏の発表、「死者」と一緒に踊る老体——『ラ・アルヘンチーナ頌』の分析」は、バレエ、モダンダンス、土方舞踏との比較

によって大野氏の舞踏世界の独自性を浮き彫りにするとともに、「リアルヘンチーナ頌」を鋭く分析することで、舞台に「生活」の次元を立ち上げようとしたその固有のダンスの方法論を明瞭に示した。さらにイタリアのポローニャ大学教授であるエウジェニア・カジニ・ロバ氏は、「ヨーロッパにおける大野一雄及び舞踏研究」というタイトルで、二〇〇二年に開設された大野一雄アーカイブの活動状況、また一九八〇年代からヨーロッパで知られるようになった舞踏の受容のされ方の推移、そして近年のヨーロッパにおける大野一雄氏及び舞踏研究の現状、展望が詳細に語られた。この日の最後は、「大野一雄・写真・蕭白」と題して、本学教授山下裕二氏の司会で、美術史家辻惟雄氏と写真家細江英公氏の対談が行われた。両氏から見た大野一雄氏の舞踏世界の魅力がまず語られるとともに、大野氏が辻氏の著作を通して曾我蕭白と出会い、その絵画が大野氏に与えた大きな影響、そしてさらに細江英公氏が大野氏の身体に、蕭白の絵画をプロジェクトで投影し撮影した写真の映像も交えて、大野氏と様々な芸術諸ジャンルとの相互交流、興味深い舞踏創造のプロセスの秘密が対談の中で明かされた。

翌十八日は、最初に舞踏家笠井叡氏の発表「大野一雄氏との出会い」があり、貴重な入門当初からの稽古の模様や師弟関係のエピソード、舞台での共演の思い出などを具体的に語りながら、大野氏の舞踏世界の本質と魅力に触れ、斬新で独自な大野一雄論を展開した。続いて、南山大学講師柳澤田実氏による

「キリスト教から読む大野一雄——『魚釣り』としての人間」の発表があり、ギブソンのアフォーダンス理論を導入することで、「魚釣り」としての人間」というモデルに集約される、大野一雄氏の舞踏と福音書のイエスの両者が体現するエコロジカルな人間理解の可能性を、説得力のある論理の積み上げで語った。さらに演劇評論家渡辺保氏は、「幻想の身体・大野一雄」というタイトルで、一見グロテスクに見える大野氏の舞踏の女形が、なぜこよなく美しいものになっていくのかということを、身体は幻想であるとする古来からの身体観に基づいた日本の古典劇の変身の手法に注目し、それが大野氏の身体にも生きていることを的確に解析しながら、〈幻想の身体〉として伝統演劇の豊かな水脈に位置づけた。そして最後に、本学教授四方田犬彦氏の司会で、発表者全員による熱のこもったパネルディスカッションが行われ、大野一雄氏の舞踏における空間の強度の問題、生活者・信仰者・芸術家としての大野氏のあり方、また師と弟子の問題、さらには「古い」の課題などについても真剣な議論が重ねられた。

両日とも多様な層の聴衆が熱心に耳を傾け、またこうした規模の大野一雄氏及び舞踏の国際シンポジウムが、これまでほとんど行われてこなかったこともあり、この試みが一つの契機となつて、今後さらに様々な切り口の研究活動が進展し、議論の場が活性化していくことを願っている。以下に掲載されるのは、発表論考の一部とパネルディスカッションの内容である。